幼小の学びをつなぐ

～幼小の教師間で子供理解を深めるための工夫～

岩手大学教育学部附属幼稚園　副園長　千　葉　紅　子

１．主題設定

新教育要領において、「幼稚園教育で育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする」とあり、幼小の教師同士が共に子供たちの成長について共有したり、環境や援助や指導についてその意図を伝えたり理解し合ったりすることが求められている。

本園と附属小間でも、これまで様々な形で連携を重ねてきているが、平成 29 年度から幼小の交流活動や引き継ぎ等の中で、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』や 5 歳児年間指導計画をもとに、幼児の体験や学びについて教師同士理解することを進めてきている。

今年度は、幼小の教員同士話し合いができる一つの機会である幼小交流活動の計画･実施･反省の中で、接続を見通した子供の学びをより共有していくために、幼稚園としてどのような工夫ができるか考えたい。

２．研究のねらい

幼児教育から小学校教育への接続を見通した子供の学びを教員間で共有し、理解を深める。

３．研究の方向性

幼稚園で育まれている資質・能力をどのように小学校と共有することが円滑な接続につながるのか、幼小交流活動に視点をあて、その計画・実施・反省を記録・整理したり、幼小の教員同士で幼児の日々の遊びや生活について『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』をもとに話し合ったりする。また、活動に取り上げる具体的な教材を通し、互いの教材観や教育内容、指導方法等も話題にし、日々の保育や授業の見直しや工夫につなげる。

４．研究の内容と方法

幼小交流活動にかかわる教員同士の話し合いにおいて、次のような工夫をする。

(1) 話し合いの様子をビデオに撮り、園内で検討する。

(2) 日々の遊びや生活の様子を写真やエピソードで伝える。

(3) 5 歳児年間指導計画や生活科単元指導計画を拠り所に交流活動を振り返る。

５．実践事例

(1) 話し合いをビデオで撮り、園内で検討する

＜交流活動年間計画の話し合い(4 月 19 日)＞

幼稚園（年長組担任、前年度年長組担任）と小学校（教務主任、1 年生担任）とで行った。

幼稚園から昨年度の成果と課題を話した。交流活動にテーマ（季節や自然とのかかわりなど）がありよかったが、いつも“人とのかかわり”に重きが置かれた話し合いとなり、5 歳児年間指導計画や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にある「思考力の芽生え」や「豊かな感性と表現」などでの読み取りも必要だった。

小学校からは、1 回目は出会いなので“人とのかかわり”を大切にする。2･3 回目は「感性」を揺さぶるような内容にする。小学校でも「感性」を研究しており「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「豊かな感性と表現」につながる。4 回目は互いに進級の準備となる内容にするなど、4 回の交流の大まかな見通しが提案された。これらを元に交流活動の方向性を共通理解した。

後日、この話し合いを園内で検討した。

―検討したことから―

○幼稚園が 5 歳児年間指導計画や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して話すと、小学校もそれに関連しての応答がある。このような発信の工夫が、教師間で子供の学びをつなぐきっかけをつくる。

(2) ５歳児年間指導計画や生活科単元指導計画を拠り所に交流活動を振り返る

＜第１回　ペアの相手を知り親しみをもつ「春のケーキ作り」（5 月 27 日）＞

活動までの様子

交流活動年間計画で確認した１回目の方向性（人とのかかわりを大切にする）と、互いに今楽しんだり取り組んだりしていることから計画を練ることとした。

本園５歳児年間指導計画では、

～5 歳児Ⅰ期（4～5 月）（抜粋）～

発達の過程 年長組になった喜びや自覚をもち、年長児としての生活に安定していく時期
・学級を超えた友達や新入園児、小学生など多様な人と触れ合い、親しみをもつ。 （社会生活との関わり）

とあり、さらに園庭での土や草花を使った遊びとの関連をもつようにすることとした。

一方、小学校学習指導要領の生活科の内容の全体構成において示されていることを踏まえ、さらに単元名「校庭の春を見つけよう」との関連ももつようにすることとした。

～生活科の内容の全体構成（抜粋）～

身近な人々、社会及び自然とかかわる活動に関する内容 (6) 身近な自然を利用したり、身近にあるものを使ったりするなどして遊ぶ活動を行う

また、この計画にあたり、園の教員で話題にしたことは、互いに初めて出会う場となることを考慮し、単に子供同士を交流させるのではなく、ものを介しながらかかわる状況作りが安心して取り組むことにつながるのではないかと話し合った。

以上のことを踏まえ、春の自然との関わりを楽しめる土や草花を使った『春のケーキ作り』をすることとした。

さらに、限られた時間で互いを知り楽しく活動するために、土は少し湿らせてから型抜きができる容器に入れ園から持ち込み、草花は園からのものと小学校で一緒に探したものとを使うこととした。１年生担任からは、なかよしタイムのワッペン準備と、ケーキに使った土は朝顔の土に混ぜて生かす提案をもらった。

活動の様子と事後の協議

☞は幼児期の終わりまでに育ってほしい姿等

【エピソード①　5 月 27 日　活動当日の姿から】

園児は、小学校に出発前「１年生のために･･･。」と呟きながら、園庭の草花を摘んだり、土を容器に詰めたりし、小学校へ向かった。

小学校に到着すると、緊張や不安からか硬い表情が見られた。しかし、「なかよしタイム」で自己紹介や手作りワッペン（ネームプレート）を付けてもらうと、表情がだんだん和らいでいった。**[☞思いやり、親しみ・安心感]**

いよいよケーキ作りへ。容器に詰めてきた土をお皿に移す場面では、小学生に、「まずは、お皿を上に。そして、くるっと一回転するといいよ。」と声を掛けられ、「分かった。でもこぼれそうだから、一緒におさえてくれる？」とお願いする姿も見られた。**[☞思考力、自立心]**

こぼれずに、皿に移し終えると、ハイタッチをし、トッピング用の草花を探しに、勢いよく走り出した。**[☞協同性]**

「自己紹介で、緑が好きって言っていたよね？だから緑の葉っぱをいっぱいのせるのはどう？」と小学生に声を掛けられて笑顔になる子、図鑑をじっと見て、「〇〇ちゃんが持っているハルジオンってこれだよね？」と小学生に尋ねる子、「これ（木の枝）をろうそくにするといいんじゃない？」と小学生に提案する子など様々な姿があった。**[☞自然への興味関心、自信の高まり、自己肯定感]**

トッピング用の草花集めを終えるとケーキの飾り付けを始めた。「ろうそくは真ん中にたてよう！」「お花だけじゃなくて、茎も使うのはどうかな？」「すごい！それいいね！」「ケーキだけじゃなくて、お皿にも盛り付けるのはどう？」「わぁ！私たちのケーキきれいだね。」などと、互いに自分なりの思いを伝え合いながら、ケーキ作りを進めていた。**[☞協同性、豊かな感性と表現、思考力、言葉による伝え合い]**

ケーキができあがると、どのペアも笑顔。園児から、「お兄さんたちと一緒に、ぼくたちだけのケーキ作りができて楽しかったです。」「ワッペンをくれたのも、お花集めしたのも、ケーキ作りしたのも、全部全部楽しかったです。」「ま

た一緒に遊びたいです。次はいつかなと思いました。」と感想が聞こえてきた。**[☞協同性、自己肯定感、安心感]**

【エピソード②　5 月 28 日　翌日の姿から】

「今日もケーキ作り！ケーキ作り！」と意気込むA 児。シロツメクサをいっぱい集める。「いつものお花と違うね。」と担任に声を掛けられると、「好きなのは、ピンク（のお花)。でも、今日は、このお花の気分！」と黙々と茎と花の部分を分け、花の部分だけをケーキにトッピング。「見て！ホイップクリームみたいでしょ？」と、円周上に等間隔で並べていた。**[☞健康な心と体、豊かな感性と表現、数量や図形への関心・感覚]**

後日、A 児のグループの担当教員から、そのグループの小学生が「シロツメクサって、ホイップクリームみたい。」と話していたと聞く。A 児の姿は、幼小交流からの刺激と感じた。**[☞道徳性の芽生え、自立心]**

さらに話し合う中で、

＊子供たちは、自分でどんどんやりたいことがあると分かった。今後もこのような子供たちの姿を生かした活動を考えるとよい。

＊テラスに並べたケーキを見て、活動の余韻を楽しむ姿があった。「またやりたい！今度はいつやるの？」とか、振り返りカードにそれぞれの楽しかった体験が多様に書かれていた。

＊ひと時の時間ではあったがペアの子供の名前をしっかり覚えていたことにも驚いた。

―活動や協議から学んだこと―

○活動の方向性にある「親しくなる」とは、活動が楽しく夢中になることに支えられている。そのためにも、教材について一緒に研究し、教材のもつ価値や可能性を共有するなど教材への理解が必要である。

○交流活動の前や活動後の姿の中にも子どもの学びを読み取ることができる。

(3) 日々の園内での遊びや生活の様子を写真やエピソードで伝える

＜第 2 回　活動を通し、仲よくなる「シャボン玉で遊ぼう」(7 月 10 日）＞

活動までの様子

第 2 回目は 7 月となることから、5 歳児年間指導計画Ⅱ期（6～9 月）の内容「小学生と一緒に活動に取り組みながら、小学生とのかかわりを楽しんだり、一人一人のよさを感じたりする」とのかかわりを、1 年生は生活科の単元のねらい「ペアの園児と遊びを楽しみ仲よくなることができる」とのかかわりを考え、構想した。さらに、その時期の遊びや生活科の活動も考慮し、シャボン玉での活動を検討した。

また、第 1 回目の活動から学んだことを生かし活動が充実するには、教材への理解が大切と感じ、事前に園でのシャボン玉遊びの様子を、写真やエピソードで伝える準備をした。

～エピソードから（抜粋）～

3 歳児 B 児は、初めてシャボン玉がふけるようになり、繰り返し膨らませ飛ばしていた。偶然太鼓橋の支柱にシャボン玉がくっついたことがきっかけで、色々な場所にシャボン玉つけをはじめた。花やクモの巣、コンクリートの上など試した。さらに、一旦くっついたシャボン玉をストローで取ることが出来るかや、ストローをシャボン玉に差し込んでもこわれない時があるなど発見していく姿が見られた。偶然の出来事から興味関心が引き出され、夢中になる姿には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる健康な心と体、自立心、思考力の芽生え、自然への興味関心等が見られる。

4 歳児では、自分なりにシャボン玉がふけると、高く遠く飛ばしたい、たくさん飛ばしたいと考え、風がよく通る築山に移動し試していた。また、どこまで大きく膨らませることができるか挑戦したり、C 児は膨らんだシャボン玉をよく見るうちに、表面が虹色になっていることを発見したりした。自然の現象とつなげて思考したり、科学的な好奇心や探求心とつながる体験をしていることを伝えた。

この教材のもつ豊かさや可能性をさらに共有するため、一緒に教材研究をすることとした。

活動の様子と事後の協議

【エピソード③　7月2日~活動前の姿】

D 児は、割れないシャボン玉ができる液作りに興味をもち、水と洗剤に水飴を加えるという情報をテレビ番組で得てきた。その様子に興味をもったＥ児やＦ児も加わり何度か試した。その中で闇雲にたくさん入れればよいのではなく、材料をおたま何杯分かと計り、

「絶対に割れないシャボン玉液の配合」を見出していた。忘れないようにと、G 児はメモをとる姿もあった。[**☞思考力の芽生え、社会生活との関わり、協同性、自立心、数量、文字、ことばでの伝え合い**]

【エピソード④　7月10日　活動当日の姿から】

初めはそれぞれ準備してきた道具を使ってシャボン玉遊びをする姿が見られたが、徐々に近くにいる友達へ関心が向き、活動終盤には、シャボン玉をペーパー芯でキャッチするなど、互いの動きを受け新たな楽しみを見出していた。

【エピソード⑤　1 年生の振り返りカードから】

反省会で１年生の担任から振り返りカードを見せてもらった。触れ合う楽しさと共に、その子ならではの豊かなことばの表現があった。

～附小生活科第２回目の振返りカードから～
「前略　（シャボン玉が）こんなに出てくるのははじめてですよ。ゆめにもおもわなかったです。」☞その子なりの豊かな表現

さらに話し合う中では、

＊活動でねらう姿の共有やペアでの活動を深めていく状況作りも、もう少し検討が必要だった。

―活動や協議から学んだこと―

○園での遊びやその中の体験や学びを具体的に伝えることは、互いの教材観を深める。
○体験を通した豊かなことばの表現は、国語の作文など教科へつながる可能性がある。
○活動でねらう姿やペアでの活動の充実には、指導案の吟味も一緒に行う必要がある。

(4) ５歳児年間指導計画や生活科単元指導計画を拠り所に交流活動のねらいの姿を共有する

＜第３回　活動を通し、より仲よくなる「どんぐりで遊ぼう」(11 月 7 日）＞

活動までの様子

3 回目は、一緒に指導案を吟味する時間を取り、ねらいにあげている姿、その姿に向かう環境構成について話し合った。

5 歳児年間指導計画Ⅲ期（10～3 月）の発達の過程「友達と協力し合って遊びや生活を進めていくようになる時期」に入り、相手の思いを受けとめたり自分の考えを伝えたりしながら遊ぶ体験が重ねられるようにしたい。1 年生も会話が重なったり行動などでも思いを伝えたりコミュニケーションの機会を大切にすることとした。

また、これらを踏まえ、さらに遠足でどちらもどんぐりを拾ってきたことから、「どんぐりを使った転がしコース作り」の展開を考えた。

限られた時間でやりとりを重ねたり、それぞれを発揮したり、相手の思いに気付いて行動したりすることを想定し、材料準備、場の設定等一緒に検討した。

活動の様子と事後の協議

【エピソード⑥　11 月 7 日　活動当日の姿から】

段ボールを切ろうとしている園児の姿を感じ、一年生担任が「ここ一緒にやってみたら」と声を掛けたり、様子を見ながらコースのイメージを共有するための試行錯誤にかかわったりしていく中で、徐々に自分たちなりのイメージがわき、最後は、紙コップキャッチする案を出した園児の動きに心を向け、互いに関わり合いながら自分たちのコースの楽しさを見出す姿が見られた。[**☞協同性、自立心**]

【エピソード⑦　11 月 7 日　活動当日の姿から】

白プラダンを取り付けたコースを作っていたグループに、その後どうしようかという様子を感じた幼稚園の教師が、白くＵ字型のコースから、「スノーボードのハーフパイプみたいだね。」と声を掛けた。するとそれをきっかけに、子供たちの気持ちも動き、再び

どんぐりを転がし始めた。どんぐりが行ったり来たりする途中に穴を開けるアイディアを思いつき、そこに三人の心も重なり、「ここに落ちたら成功！」と自分たちのルールを見出し楽しんでいった。[**☞自立心、協同性、言葉での伝え合い**]

さらに話し合う中では、

＊子供たちをかかわらせようとするのではなく、子供の動きや表情、何をしたいと思っているのかなどを見て、教師もどう関わってくか（どう声を掛けようか、どう認めようか、どのタイミングでかかわろうかなど）考えることができた。考えながら活動の過程に援助していくと、活動が深まりをもち、体験が広がることを実感した。作り終えることが目的ではなく、作っていく過程の中で子供の体験が広がったり深まったりしていくことの大切さを感じた。

＊場の設定で終わらずに、子供たちがやりたいことが実現できるよう、常に状況や環境構成をしていくことも重要である。

―活動や協議から学んだこと―

○子供の具体的な姿を理解し共有することは、活動の中で、どう遊び込み、豊かな体験につなげていくか、教師の援助の構想を支えると互いに理解する機会となった。そのことにより、子供たちの主体性や対話が引き出されることも実感し、ねらう姿に近づくと感じた。

○子供の内面理解から出発する大切さを改めて感じ、日々の保育の中でも生かしていくと、日々の保育も質が変化する実感をもつことにつながった。

６．成果と課題

(1)成果

○話し合いの中で、幼児期に何を学び、育っているかを幼稚園から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や５歳児年間指導計画に立ち戻りながら伝える工夫をすると、小学校からもその視点での応答があり、子供の学びを共に考える機会になる。

○子供の多様な体験や学びを支えるには、楽しく夢中になるような活動内容の充実が重要である。そのために、一緒に教材研究や指導案の作成、ねらう姿の吟味や共有と共に、活動にかかわる園での遊びの中での様子を活動と絡めて伝えるなど、教材への理解を深める機会を作ることが大切である。

○活動前後の子供の姿の中にも、多様な体験や学びが読み取れた。前後の遊びや活動も含めた活動の見通しをもつことが必要である。

(2)課題

○幼小間で体験や学びのつながりがより見通せるよう、協議の中で視点（例えば、持ち寄ったエピソードのどれかを取り上げ、“体験や学びのつながり”を協議する等）をもって話し合いを深める機会を加えていく。

○幼小それぞれにある教育課程や指導計画を、接続を意識したものに再編していくよう、交流活動を担当する者同士だけでなく、幼稚園と小学校が組織として一緒に話合いをもつような体制作りをする。